

## 奈良県河合町 河合第二中学校「平和登校日」開催報告

- 1 日 時：平成 23 年 8 月 9 日（火） 9 時 00 分～11 時 30 分
- 2 場 所：奈良県河合町立文化会館 「まほろばホール」
- 3 講 師：NPO 法人都市災害に備える技術者の会（神戸防災技術者の会）  
（陪席）神戸防災技術者の会（神戸市民病院機構）  
（陪席）NPO 法人都市災害に備える技術者の会  
（陪席）NPO 法人都市災害に備える技術者の会  
（陪席）NPO 法人都市災害に備える技術者の会
- 4 対象者：河合第二中学校 1～3 年生全員 約 270 名と保護者 10 名  
校長先生他担任 25 名
- 5 題 名：『命』～阪神・淡路そして東日本大震災で学んだこと～
- 6 内 容：
  - 1) はじめに
  - 2) 「震度 7」その瞬間は（阪神・淡路大震災と東日本大震災の共通点と異なる点）
  - 3) 建物の下敷きになった人を助けたのは
  - 4) 道路や鉄道、水道などの無い生活は
  - 5) 液状化による被害は
  - 6) その時の市民生活は
  - 7) その時の友達的生活は
  - 8) 『命』を守る為に 減災のためのキーワード「自助・共助・公助」

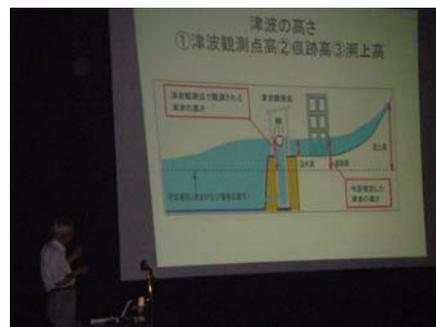
上記内容を講師作成によるパワーポイントで説明した。

途中、『6) その時の市民生活は』の説明時に DVD 『幸せ運ぼう』の中から「その時学校では～防災拠点としての機能～」を放映し、よりわかりやすく当時の実態を伝承した。

また、講演の最後には上記 DVD 『幸せ運ぼう』の中から「しあわせ運べるように（コーラス）」を流し、一緒に口ずさんでもらった。



熱心に講演を聴く生徒達



津波の説明図



「幸せ運ぼう」のコーラス



生徒会長から「お礼の言葉」を受ける講師

## 7 「平和登校日」全体の行事内容

- 9:00 生徒集合
- 9:15 開会 校長先生のお話
- 9:20 三年生沖縄の平和学習感想文発表（3名）
- 休憩
- 9:40 講師・スタッフ紹介（校長先生）
- 9:45 講演開始
- 11:00 講演終了
- 11:05 質問
- 11:05 お礼の言葉（生徒会長）
- 11:10 退場・解散
- 11:20 講演会終了後のミニ反省会
- 11:35 辞去

### (1) 校長先生のお話

- ・ 8月6日は広島に、8月9日は長崎に原子爆弾が投下された日である。  
また、3月11日は東日本大震災が発生した日である。  
原爆・原発の恐ろしさを一番よく知っているのは日本人かもしれない
- ・ 陸前高田市の広田小学校では毎年行っている地震・津波に対する訓練が奏功したのか、一人の犠牲者もでていない。
- ・ 宮城県気仙沼小学校に避難して生活している中学生が、壁新聞「ファイト新聞」を発行し、明るいニュースを提供して、みんなを元気付けている。  
水運びやトイレ作り、お年寄りにマッサージのサービスなど、自分達で出来ることは何かをそれぞれ考えて自主的に取り組んでいる。
- ・ 1995年阪神・淡路大震災が起こり、多くの方が亡くなりました。今日は、その時実際に体験された講師の方に来ていただいて、「命」をテーマにその時の状況もお話していただく。
- ・ 今日は、毎日元気にすごせることを感謝しながら、「命の大切さ」や「平和」であることの大切さを深く考えてもらいたい。そして、自分にできることを精一杯してほしい。



校長先生の挨拶



校長先生の挨拶を聴く生徒達

### (2) 三年生沖縄の平和学習感想文発表

3C M君

修学旅行1日目 ガマ（洞窟）の見学

終戦間際のガマでの不衛生な生活状況を聞き、自分達の現状の「幸せ」を痛感する。

## 2日目 ひめゆりの塔見学

男子のほか女子も看護役などとして参戦。死に切れない兵隊達に青酸カリを服用させる。平和記念公園では「戦争はどのような根拠があろうともやっけてはいけない」ということを強く感じた。

## 3A Mさん

### 1日目 ガマの見学

真っ暗なガマの中で赤子の鳴き声がすると米兵に見つかるからということで「殺した」という話を聞き、ショックを受けた。

日本の戦況を先生は生徒達に言ってはいけなかった。これは辛い事であった。

「戦争中、誤った教育がなされていた」こと、「正しい情報が伝えられなかった」ことこれは間違いであると感じた。

学んだこと：戦争は多くのものを失い、・・・戦争は絶対してはいけない。

沖縄であった事を知り、戦争をしない気持ちを持った。

## 3B Kさん

平和学習でわかったこと：

- ・ 戦争の悲惨さ、命の大切さを知り、現在の幸せを強く知る
- ・ 同年代の人が命をなくした事実を知り考えさせられた。
- ・ 自分の命を犠牲にして何かをすることの重要性
- ・ 12万人が死んだという事実
- ・ 「人の痛みを感じること」、「人は一人では生きていけないのだ」という事を強く感じた。

(3)質問 担任の先生から「今日の講演を聞き、自分達でできる事をしっかり考えて行きたい」との生徒達への訓示の後、質問を募ったが誰からも質問はなかった。

### (4)お礼の言葉（生徒会長）

今日の講演を聞き、

- ・ 今の自分達の生活は幸せである。
- ・ 3月11日の震災を語り継ぐことの重要さ
- ・ 被害を最小限に収めるにはどうしたらよいのかを考えて行きたい
- ・ ボランティアの重要性を痛感した

との感想があり、我々への絶大な謝辞で結ばれた。

## 8 講演会終了後のミニ反省会

講演会終了後、講師控え室で立ち話ではあるがミニ反省会を行った。

反省会には、教頭、担任の先生のほか、河合町安心安全推進課の主事にも加わって戴いた。

- ・ 講演内容について、これまでの出前授業の内容より「液状化の実験」を割愛するなど土木的な内容を少なくし、地震という自然災害を通しての人道的な・助け合いの重要性に主眼を置いた講演内容にするという点で満足できるものであったかを確認したが、「十分伝わった」との感想が得られた。
- ・ この種の講演は、聴いたときには深い感動を受けるが記憶や心意気は時間と共に薄れていくものであるから、繰り返し行うことが必要であるとの意見は皆さん共通していた。

## 9 講演会を終えての感想

- ・ 講演中、一切私語がなく熱心に聞き入っていたことに感銘した。

- ・講演の内容について、専門用語が多く、どの程度理解できたか不明であるが、例えば「梁」、「桁」、「筋交い」などはスクリーンをレーザーポインターで指し示すなどのより丁寧な説明が今後必要と感じた。  
また、「耐震補強」については写真で説明したが、「耐震診断」についてももう少し言葉による説明を付け加えれば一層理解し易かったのではないかと思う。
- ・「まほろばホール」の規定により、筆記用具の持込が禁じられていたので、これまでの学校体育館での講演のように、講演を聞いたその場でメモをとることができなかった。  
この点、どの程度記憶に残っているかが心配であるが、2学期初めの感想文提出を待って判断したい。
- ・最後の質問コーナーで誰からも質問が無かったのは少し寂しい思いがした。  
講演内容が全て理解できたとは考えにくく、手を挙げて質問するのが気恥ずかしい一面があったのかもしれないが、折角の機会に手を挙げて質問するという「訓練」も学校教育の一つとして必要ではなかろうか。

## 10 補足

夏休み中に1日登校して「平和」について学習する事を河合第二中学校では毎年行っているとのことである。

去年はちゃん・へんさんを講師に迎え「The Panic Art」（平和とは全員が毎日安心してご飯を食べられること）の講演会をした。

また、一去年は栗本英世さんを講師に迎え「カンボジアの子どもたちの現状と人権」について学んだということです。

さらに、今年の『平和登校日』の事前学習として、

- ①阪神・淡路について知ろう（阪神・淡路大震災の概要）
- ②『1・17希望の灯り』（神戸市役所南の東遊園地の「慰霊と復興のモニュメント」に刻まれた言葉）（下記参照）

について学ぶと共に、ある警察官の手記「語りかける目」についても学習したとのことでした。

（ある警察官の手記「語りかける目」については別紙参照）

### 一・一七希望の灯り

一九九五年一月十七日午前五時四十六分

阪神淡路大震災

震災が奪ったもの

命 仕事 団欒 街並み 思い出

・・・たった一秒先が予知できない人間の限界・・・

震災が残してくれたもの

やさしさ 思いやり 絆 仲間

この灯りは 奪われた すべてのいのちと

生き残った わたしたちの思いを むすびつなぐ

(以上)

(別紙)

## 語りかける目

1月23日、私は2回目の出動をした。

任務は長田署管内の救助活動・遺体搜索。そして、村野工業高校体育館における遺体管理と検視業務の補助であった。仮の遺体安置所になった体育館は、たくさんの遺体と、それに付きそう遺族であふれていた。そんな中で、一人の少女に、私の目はくぎづけになった。その少女は、ひざの前に置いた、焼け焦げた「ナベ」にじっと見入っていた。泣くでもなく、哀しむでもなく、身動きもせず、ただじっと見入っていた。私は、その少女に引かれるように近寄っていった。「ナベ」の中は、小さな遺骨が置かれていた。

「どうしたの。」

思わず問いかけた私の一言が、その少女を泣かせてしまった。どっとあふれだした涙をぬぐおうともせず、懸命に私の目を見つめ、とぎれとぎれに語り続けた。「ナベ」の中は、少女が拾い集めた母の遺骨であるという。

その夜(1月16日)も少女は母に抱かれるように、1階の居間で眠っていた。何が起こったかも分からないまま、気がついたときには母とともに壊れた家の下敷きになって、身動きもできない状態になっていた。それでも、少女は少しずつ体をずらし、何時間もかけて脱出できた。家の前に立って、何がなんだかわからないまま、どの家も倒れているのを見た。多くの人が、何かを叫びながら走り回っているのを見た。しばらくして、母が家の中に取り残されていることに気がついた。

「お母さんを助けて。」

「助けてお願い。」

と、走り回っている大人たちに片っ端からしがみつきの声、声を限りに叫び続けた。だれにもその叫び声は聞こえなかった。声は届かなかった。迫ってくる火事に、母を助けられるのは自分しかない、と、哀しい決断を強いられた。

母を呼び続け、懸命に家具を押しよけ、がれきを放り投げ、一步一步母に近づいていった。やっとの思いで、母の手を捜し当てた。姿は見えなかった。母の手を見つけたとたん、その手を握り締めた。そのとき、少女の手は血まみれになっていることに気がついた。

「おかあさん、おかあさん。」

「おかあさん。」

手を握り締め、泣きながら叫び続けるだけであった。

火事は間近に迫っていた。火事の音が聞こえ、熱くなってきた。母は懸命に語りかけたが、かぼそい声で少女には聞こえなかった。

「おかあさん、おかあさん。」

と、叫び続ける少女に、名前を呼ぶ母の声がようやく聞こえた。

「ありがとう。もう逃げなさい。」

と、母は握っていた手を放した。

熱かった。怖かった。夢中で逃げた。すぐに、母を抱え込んだまま、わが家が燃え出した。立ち尽くし、燃え盛るわが家をいつまでも見続けた。声も出なかった。涙も出なかった。

翌日、何をしたか、どこにいたか、覚えていない。

翌々日、少女は一人で母を探し求めた。そして見つけた。

少女は、いま一人で、見つけた母を「ナベ」に入れ、守り続けている。

語り続ける少女の目から、いつのまにか涙が消えていた。ただ聞くだけの私は、声も出ず涙があふれ続けた。母と二人、この少女がどんな生活をしているのか、私は知らない。ひとりになったこの少女に、どんな生活が待っているのか、私にはわからない。

「この少女に神の加護がありますように。」生まれて初めて「神」に祈った。この少女に、なぐさめの言葉も、激励の言葉も何も言えなかった。何度も何度もうなずくだけで、少女の前を逃げた。

少女は、最後まで私の目を見続け、語り、そして語り終えた。その目は、もっと多くのことを私に語りかけ、今も語り続けている。

目は生きていた。

哀しいと思った。

美しいと思った。

強いと思った。

少女の名前を聞くのさえ忘れていた。

ある警察官の手記より

『明日に生きる 阪神・淡路大震災から学ぶ』  
防災教育副読本（中学生用） 兵庫県教育委員会